

# 「毛織物の父」片岡春吉

明治31年(1898)、まだ尾西地域で綿織物業が全盛期だった頃、片岡春吉は津島で初めて毛織物業を起こした。急速な毛織物需要もあって規模を次々と拡大。一方で片岡は毛織物業発展のため、起業家たちへ援助や指導も積極的に行った。このため、業界からは「毛織物の父」と称えられるようになる。大正6年(1917)、片岡毛織を中心とする毛織物産業は、ついに尾西地域の綿布生産額を逆転し、この地域を毛織物王国として知らしめることとなった。片岡春吉は大正12年(1923)に没したが、津島の毛織物業界は昭和9年(1936)、彼の貢献と遺徳を讃えるため天王川公園に銅像・顕彰碑を建立した。



天王寺公園に建つ片岡春吉銅像  
(昭和11年6月建立、昭和28年5月再建)



本セルヂ(セル)の縞帖 (写真:片岡毛織)

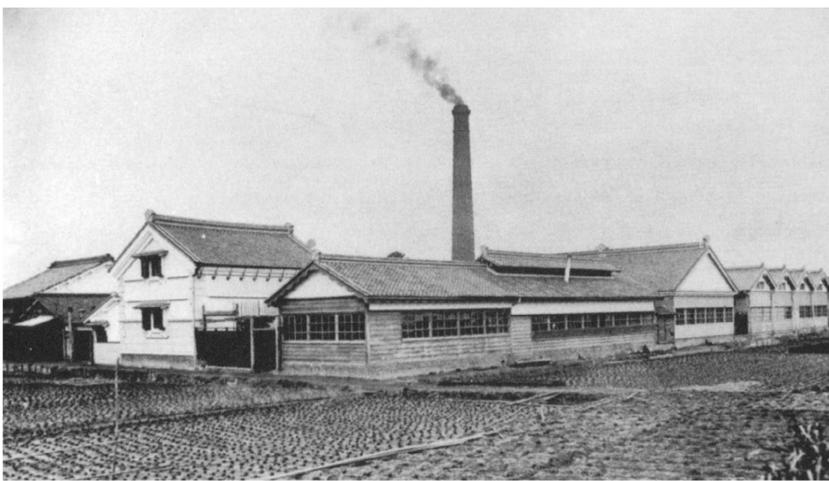
片岡春吉は明治5年(1872)岐阜県養老郡多良村で生まれる。尋常小学校を卒業すると手織機の部品・竹箴づくりの奉公を務めた縁で津島の箴職人となったが、箴の将来性に疑問を持ち、織物業に挑戦しようと明治29年(1896)の春、全国の主な織物産地を廻る。東京モスリン紡織株式会社を訪れ、そこで初めて毛織物という自分の進むべきものを見つけ入社する。

2年間でモスリン製織技術を身につけ津島に戻り、全財産を投入し、工場を建てる。

持ち帰った手織機をもとにモスリン製造を試みるがうまく

いかず、セル(当時は「セルヂ」)に挑戦する。当時使われていた一巾(約34cm)織機よりも、セル地製織に都合のよい二巾織機を作り上げ、さらに金綜統や巻取り機、テンブルを開発し、ついに片岡式織機を創り上げる。織物の色彩や光沢など、品質を良くするための染色整理加工方法についても創意工夫をこらして、輸入品に劣らない高品質の毛織物を作る研究に没頭する。明治34年、片岡は成果である毛織物の「特製小中柄着尺本セル」を第5回愛知県品評会に出品、銅賞牌を受ける。セルの製織は脚光を浴び、日露戦争の軍用服地の需要に応じて、生産量さらに増大。明治39年、片岡はイギリスとドイツに全資本を使って四巾動力織機を注文し、組み立てる。以後、片岡の工場では、縞セルの大量生産が始まり、国内のみならず海外にも輸出されるようになった。(黒田・浅井著「津島人物伝」より)

左の写真は明治42年に稼働した新式のドイツ製四巾動力織機、中央左に立っている人物が片岡春吉と思われる。



大正期の片岡毛織工場 出典:『片岡毛織90年史』



明治42頃の片岡毛織工場内部 出典:『歴史写真集 津島』